

553.61 : 550.822 (521.12)

岩手縣岩手粘土中沢試錐報告

岩手県下閉伊郡小川村名目入にある岩手窯業鉱山の耐火粘土は、戦時中より本邦産耐火粘土の最優秀なものとして各界から認められていた。本地域の地質調査は村岡誠・平山健両技官により再度に亙り精密な調査が行われ報告されている(村岡誠：地調速報，第91号，1949，平山健：地調速報，第63号，1948)。この結果にもとづいて昭和27年に、本所直営にて藤倉孝次・中川忠男が試錐を行い、昭和28年には後藤進が試錐を行った。

両回とも種村光郎が試錐位置の選定およびコア調査に当たった。

第1回試錐は昭和27年7月30日から10月21日まで84日間に亙り行われ、R 300 型試錐機を使用し、初孔径75 mm，終孔径65 mm，コア採集率は80%であった。

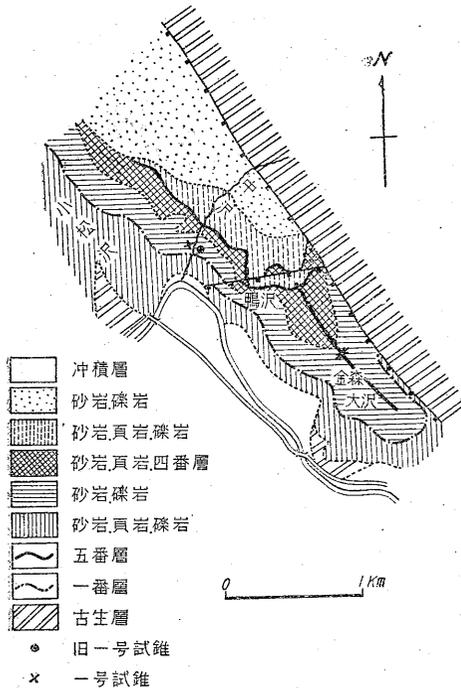
第2回試錐は昭和28年9月12日から10月8日まで27日間にわたり行われ、RL 150 型試錐機を使用し、初孔径，終孔径ともに75 mm で，コア採集率は80%であった。

試錐実施位置は鉱区内の中沢を挟み、西北西—東南東方向に60 mの間隔をもつて旧一號試錐，一號試錐を実施した。

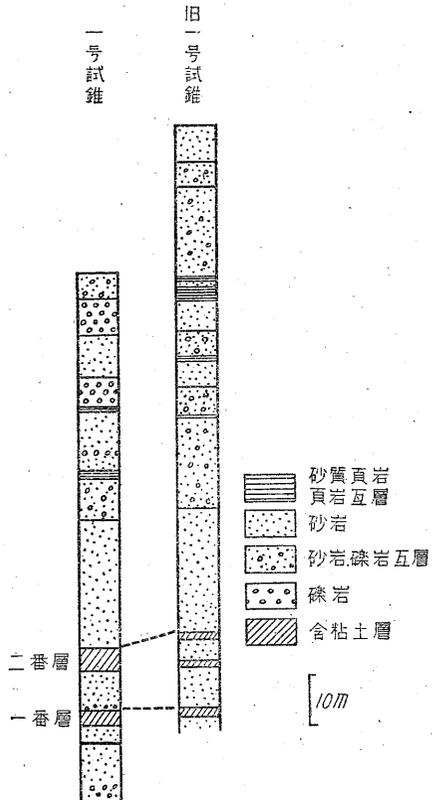
中沢より東方約220 mの所までは鴨沢坑が延び採掘されつつある。しかし西方に行くに従い、耐火粘土層は膨縮に富み、その上耐火度が低下する傾向がある。本地域の地質層序はすでに地表地質調査によつてほぼ明らかとなつているが、鴨沢以西と小松沢方面の地質層序の關係に多少疑問の点があり、この附近は露出不良のため地表地質調査では解明することはできない状態であつた。

以上の理由により兩年度に亙り本地域に試錐を行うこととなつた。

試錐の結果、深度74~82.8 m，深度91~94 mで含粘土層(註1)に当り層序上からこれ等は二番層と一番層で



第1圖 岩手粘土鉱床附近地質圖(村岡誠原圖)



第2圖 試錐柱狀圖

註1) 炭層ならびに耐火粘土層を含む。

あることが確認された。

なおこの旧一号ならびに一号試錐の結果から、中沢沿いに N10~20°E の方向に西落ち 落差約 10~15 m の断層が確認され、小松沢地区との層序上の疑問の解明に一步近づいた。

試錐のコアによれば地質は第2図のように礫岩・砂岩の互層よりなり、耐火粘土層ならびに炭層近くは頁岩層となつている。しかし旧一号試錐では直接砂岩ならびに礫質砂岩が炭層に接している。

耐火粘土層は旧一号試錐では2番層に 0.5 m、1番層

に 0.85 m の SK 30~32 程度の粘土が認められる。また一号試錐では2番層に 0.4~0.8 m の耐火粘土層が 7 m 間隔に3層抜有され、1番層下盤に 1 m および 0.2 m の耐火粘土層があり、いずれも SK 31~33 で旧一号試錐結果に比べやゝ高耐火度を示している。

以上の結果鴨沢以西中沢までは、余り高耐火度の粘土を期待することはできないが、しかし中沢以西ではやゝ良好の粘土があり、特に2番層に期待がかけられる。

(調査：種村光郎・藤倉孝次・後藤進・中川忠男)

553.43 : 550.85(521.15) : 622.343

### 山形縣東鉦山および蓬坂鉦山銅鉦床概査報告

本地区は山形県南村山郡東村にあり、宮城県刈田郡七宿村に接し、奥羽本線上ノ山駅南南東 10 km に位置する。

附近の地質は基盤をなす花崗閃緑岩類とこれを不整合に被う第三紀堆積層およびこれら貫ぬく石英粗面岩岩脈よりなる。

東銅山の鉦床は花崗閃緑岩および変朽安山岩質凝灰岩中の走向 E-W、傾斜 40~50°S の裂隙充填鉦床で、2鉦脈が稼行された。鉦幅は 15~45 cm で主として硫化鉄

鉦からなり、黄銅鉦・閃亜鉛鉦・方鉛鉦を伴う。現在再開準備中である。

蓬坂銅山は変朽安山岩質凝灰岩中の裂隙充填鉦床で、走向 N 40~50°E、60~80°E 傾斜するが、その方向は必ずしも一定しない。東銅山と同型の鉦床であるが、久しく休山しているため、状況不詳の点が多い。

附図4葉(省略)

(調査：奥海 靖、高橋兵一、抄録：岸本)